

夜の八時を少し過ぎたところだった。わたしは居酒屋にいた。わたしの隣にはわたしの彼氏がいる。その向かいに彼氏の会社の人が出て、わたしの向かいにはわたしの会社の同僚がいる。彼氏の会社の人と恋人を見つけたがって、わたしの会社の同僚は彼氏を探していたから、わたしとわたしの彼氏が二人を引き合わせることにしたのだった。わたしの名前は水谷祐子で、わたしの彼氏の名前は堺俊夫だった。わたしはトシと呼んでいた。

トシの会社の人と、さっき名前を紹介された。坂上という名前のもう一人だったがはっきりしない。そのあと誰もその人の名前を呼んでいないから、確認のしようがない。中上という名前だったかも知れない。トシはその坂上か中上かはっきりしない名前の人とそ

れほど親しいわけではないようだ。わたしの会社の同僚は直美という名前の、わたしより二歳年下の二十五歳だった。

わたしたちは生ビールを飲み、イカの刺身と鶏の唐揚げと枝豆と冷や奴などを食べている。坂上か中上という人は、どういうわけか高校の同級生だという女を連れてきた。その女はラメの入ったピンクのミニのワンピースという水商売のようなファッションで化粧も濃かった。その女の名前はヨシモトサヨコといった。直美は彼氏候補に会うのには一人では恥ずかしいからと水泳教室の男友達を連れてきた。彼はわたしの知らない人で、ツヨシ君という名前だった。

この居酒屋に来るのは初めてだ。場所はJR東中野と中野のちょうど中間あたりにあった。トシがこの店を選んだらしいが、トシが以前にこの店に来たことがあるのかどうかはわからない。カウンターの中に主人らしい人がいて、和服を着てはちまきを締めたアルバイトの女の子たちが注文を聞きに来た。わたしたちの隣のテーブルにはサラリーマンの団体客がいる。わたしたちの横のテーブルには映画や演劇の話をしている七人連れのグループがいた。彼らはすでに相当酔っていて、大きな声で話をしていった。彼らの中にはスキンヘッドの人や長髪を後ろで束ねている人がいた。七人の中で女は二人で、

二人とも黒い作業着のような服を着ていた。

壁際にテレビがつけ放しになっているが誰も見ていない人がいない。プロ野球が映っていた。投げているのは巨人の桑田で、バッターボックスに居るのは横浜の鈴木だった。恐らくカウンターに坐って一人で飲んでいる人たちがテレビを見ているのだろう。カウンターはわたしの背後にある。そういう人たちがカウンターに坐っているのかわたしにはわからない。

わたしは品川にある配送会社で事務の仕事をしている。仕事は朝の九時から夕方五時までだ。その会社に勤める前は西麻布のバーでホステスをしていた。トシは家具のチェーン店で働いている。三ヶ月ほど前にタワーレコードでCDを選んでるときに知り合った。知り合ったときに何を話したか憶えていないが、絵のことは話さなかったし、今も話していない。直美にも絵を描いていることは話していない。直美は高校卒業後に山陰地方から東京に出てきてファッションデザインの特設学校に入ったがすぐに辞めたらしい。男にだまされたと聞いたが詳しいことは知らない。

直美はインターネットの出会いのサークルに入っていて何度かオフ会やねるとんパーティーに行ったが、ろくな男がいないういつもこぼしている。それで今夜トシの会社の人

を紹介することにしたわけだが、なぜか直美も男友達を連れてきてしまった。ツヨシ君は大学を出たばかりの丸の内の会社の社員らしい。水泳教室以外で会うのは初めてだと言っていた。

「だからお前は現実を見ていないって言われるんだよ」

そういう声が聞こえたが、どのテーブルからの声かわからない。この店はうるさい。音が充満している。テレビでは桑田がボールを投げようとしているが、どういうわけか音楽もかかっている。有線放送らしいが、ただ音楽が流れているのがわかるだけでどうい曲なのかわからない。はちまきをしたアルバイトの女の子が四人、食べ物や飲物を運んでいる。さっきトシがその一人の子に一瞬目をやって、タイプなんだろうなとわたしは思った。胸の大きな子だった。トシはわたしと付き合う前にサトミという胸の大きな子と付き合っていて、わたしと付き合うようになってからも、ときどき会っていた。

わたしと一緒にいるときに携帯に電話があつて、あとでこちらからかけ直すよ、とトシが言う相手は必ずサトミだった。わたしとトシは一緒に住んでいるわけではない。サトミのこともあつてトシはわたしに負い目を持っているようだ。サンダルを履いた直美の足元に何か小さな虫がいるのが見える。直美の足の指はふっくらとしている。さっき、

坂上か中上という名前の人が何か喋ったが、誰も反応しなかった。わたしは鶏の唐揚げを食べている。ニンニクの味が少しきつい、わたしは今夜は何となくタンパク質を多く含んだ食べ物を口に入れたかった。

わたしのホステス時代の友人にカエデという源氏名の女の子がいて、彼女はプライベートルドでSMをやっていた。女王様らしかった。確かに身長は高かったが、顔はそんなにきれいでもなかった。通っていた歯医者さんがマゾヒストでその世界を教えてくださいましたのだと言っていた。歯の治療器具でプレイをしたらしいが、こういうプレイなのは聞かなかった。

トシはわたしに負い目があつて、直美の話をすると、会社の男の人を紹介すると言いつ出した。直美にそのことを話すと是非紹介して欲しいというのでこういうセッティングになったのだが、わたしは本当はトシと二人きりで話したいことがあつた。大事な話なのでこういう居酒屋では話したくなかった。トシはわたしと結婚するつもりらしい。他にも女がいるが結婚するならユウコだとトシは言った。トシがそういうことを言ったのは三週間前のことだった。胸が大きいだけで他には何の取り柄もない暗い女なんだ、とトシはサトミのことを言った。サトミは風俗に勤めているそうだ。他の男のものをくわ

えた同じ口でおれのをくわえているんだと思うと興奮したりするけどそういう女とは結婚したくないだよ。

「だからお前は現実を見ていないって言われるんだよ。現実を見るっていうのは、それこそ、期待とか希望的観測とか、先入観を除外して、ありのままに現実を見るっていうことで、これほどむずかしいことはないんだけど、そんなことに誰も気づいてないんだ。お前の作品論なんか誰も聞きたくないし、お前は誰からも期待されていないっていう事実をまず直視すべきだろう。違うか」

そういったことを話しているのは誰なのだろう。サラリーマンの団体だろうか。それともスキンヘッドや長髪の人たちだろうか。直美は、坂上か中上という人のことをあまり気に入らなかったようだ。坂上か中上という人は直美のことを気に入ったようだ。ずっと直美のほうを見て、一緒に連れてきたヨシモトサヨコという女を無視している。ヨシモトサヨコは煙草を吸っている。細長い薄荷入りの煙草だ。昔はわたしも煙草を吸っていた時期があった。ヨシモトサヨコという女はなぜ坂上か中上という男に付いてこの居酒屋に来たのだろうか。坂上か中上という人に知り合いだとみんなに紹介されて挨拶したあとはずっと煙草を吸って生ビールを飲み、誰よりも早く飲み終えてウイスキーの

水割りを飲んでいいかと坂上か中上という人に聞いた。ウイスキーのグラスを持つヨシモトサヨコという女の手の甲の血管が青く透けて見える。化粧が濃いせいもある。三十年代後半のようにも四十代前半のようにも見える。

テレビでは桑田がボールを投げてバッターの鈴木はそれを見送った。直美の足元を這っている虫の数が増えた。トシの唇に冷や奴の白い欠片が付いているが、それは豆腐には見えない。直美は灰色のタンクトップを着てクリーム色のびったりとしたパンツを穿いている。わたしは、今夜何を着ていけばいいだろうかと直美に相談された。普通の服でいいと思うとわたしは答えた。だからお前は現実を見ていないって言われるんだよ。現実を見るっていうのは、それこそ、期待とか希望的観測とか、先入観を除外して、ありのままに現実を見るっていうことで、これほどむずかしいことはないんだけど、そんなことに誰も気づいてないんだ。お前の作品論なんか誰も聞きたくないし、お前は誰からも期待されていないっていう事実をまず直視すべきだろう。違うか。

わたしは幼稚園のころ絵を描くのが好きで、いつの間にか好きではなくなった。西麻布の店でホステスをやっていたころ、ある男の人がやって来て、わたしは彼に店の名刺ではなく自分の手描きの名刺を渡した。どうしてその男の人に手描きの名刺を渡したの

かは今になっても謎だ。千葉の実家を出たくてお金を貯めるためにホステスを始めたとき、角の丸い小さな水商売用の名刺が恥ずかしかった。そこには自分のものではない名前が書いてあったし、もちろん住所も電話番号も自分のものではなかった。夜一人でその名刺を見ていると悲しくなってきた、コンビニにスケッチブックと色鉛筆を買いに行き、自分で自分の名前と似顔絵を描いて、手描きの名刺を作った。その作業は楽しくて、小さいころ絵が好きだったことを思い出した。夜明けまで描き続けたこともあったが、出来上がった名刺を渡す人がいなかった。誰にも渡すことのない名刺が二百枚近く溜まった。渡す相手がいなかったが、ずっとハンドバッグに入れておいた。それを持つていると、自分の名前を忘れずにすむような気がした。店でその男の人に会ったとき、名刺を渡したくなった。どうしてその男の人に手描きの名刺を渡したくなったのか、はつきりとはわからない。その男の人がどういふ仕事をしているのかもわからなかったし、もちろん名前も知らない人だった。ただ一つだけ確かなことがある。ああいうタイプの男の人は、決してこういう居酒屋には来ることがないということだ。トシと付き合う前もトシと付き合うようになってからも、よく居酒屋を利用した。居酒屋は落ち着くし、そのへんの地中海料理とかわけのわからない店よりもおいしいし安心できる。今、わたし

は鶏の唐揚げを食べているが、素直においしいと思って食べている。トシはオニオンスライスを食べ、坂上か中上という男は肉じゃがを食べている。直美は箸でイカの刺身をつまみ、ヨシモトサヨコという女は枝豆を口に入れていて、ツヨシ君はコーンバターをスプーンで掬<sup>すく</sup>っている。誰もが自分の食べたいものを食べていて、無理をしていない。等身大という言葉があるが、居酒屋は常に等身大で、期待を大きく上回ることはないが、期待を大きく裏切ることもない。

だが、居酒屋には他人というニュアンスを感じる人間がいない。西麻布の店で、その男の人を初めて見たとき、この人は他人だと思った。この男の人は自分とは別の人間だということが、まるで体臭のように伝わってきた。よく磨かれた半透明のガラスの板がわたしたちの間に立て掛けられているようだった。たとえばトシと一緒にいるときにはそういうことは思わない。もちろんわたしとトシは違う人間だ。だが、別に抱き合ったりエッチをしたりするわけでもないのに、トシと一緒にいるだけで、自分のからだどトシのからだの境界が曖昧になることがある。たとえばわたしはテレビを見ていて、トシも同じテレビ画面を見ている。同じ箇所では二人は笑う。テレビを見て笑っているのか、一緒に笑うためにテレビを見ているのかわからなくなってくることもある。またた

たとえばわたしが雑誌を読んでトシはコミックスを見ている。そういうとき、違うものを見て何だか溶け合っているような感じがする。トシの部屋が広くないせいかも知れないが、トシの部屋にいるとき、自分とトシのからだや心の境界がわからなくなる。そういうときには、時間的な境界も溶けていくような気がする。過去と現在と未来が混じり合って、自分が一億年も前からこうやってトシと一緒にテレビを見たり雑誌を見たりして、これからも永遠にテレビを見たり雑誌を見たりするのだろうと思ってしまう。それはぞっとする感覚だ。

トシはどういうわけかわたしに負い目を持っていて、いろいろと妙に気を使うが、暴力を振るうようなことはない。直美の元の彼はよく暴力を振るったそう。その彼氏に踵で蹴られて、直美の奥歯は一本折れているらしい。よく言い争いはするが、トシから殴られたことはない。直美はその暴力的な彼氏と一緒にいるときひどく緊張したのだそう。いつ彼氏が暴力を振るうのか不安で常に緊張していたらしい。記憶を正確に辿ってみるとその緊張はそんなに嫌いじゃなかった、と直美は言ったことがある。目に見えないガラス板が二人の間であって、それがいつ割れるかわからないという感じだったと直美は言った。

わたしは、わたしとその男の人の間に目には見えないガラス板があるような気がして緊張していた。手描きの名刺を渡すと、君は画家か、とその男の人は言った。そんなあ、違いますよ、とわたしは笑った。画家か、と言われてひどく恥ずかしかった。画家がどんな人種なのかわからなかったので、画家ってどういう人なんですかね、とその男の人に聞いた。毎日、しかも一日に二十時間、絵を描き続けても飽きない人間が、画家だ、その男の人はそう答えた。

坂上か中上という人が、有線放送から流れてくる音楽に合わせて小さな声でハミングをしている。彼にはこの騒々しい店内で音楽が聞こえているのだろうか。テレビでは、桑田が投げて鈴木が見送ったボールに対し、審判がストライクのジェスチャーをした。直美の足を這っている虫は三匹だった。最初は確か一匹だけだった。虫はどこから現れたのだろうか。サラリーマンの団体が大笑いを繰り返している。誰かが何か言うたびに全員が大笑いしている。だからお前は現実を見ていないって言われるんだよ。お前は誰が見たってゴミ以下なんだ。お前の演技なんか誰も見たくない。どうしてお前は誰か自分に注目してくれるなんて思えるわけ？ それってただの傲慢なんじゃないの。そう、いった声がわたしの背後から聞こえるが、話しているのは、スキンヘッドの男と長髪の

男がいるグルーブだろうか。ひょっとしたらわたしの頭の中で聞こえている声かも知れない。

誰かが怒鳴っている夢を見ていて、眠りから覚めるときに、その怒鳴り声を実際にはアパートの前の道路工事のドリルの音だったと気づくことがある。確かにわたしは誰かが話しているのを聞いている。それはわたしたちのグルーブの誰かではない。トシはオニオンスライスを食べているし、坂上か中上という人は肉じゃがを口に入れて直美のタシントップの胸元に目をやっている。直美はイカの刺身を口に入れるところで、ツヨシ君はコンバターのスプーンから数粒テーブルにこぼし、ヨシモトサヨコという女は左手にウイスキーのグラスを持って右手の人差し指と中指で煙草を挟んでいる。お前は事実を見ていない、とその声は言っている。考えてみると、わたしの友人や知人の中でそういったことを言うような人は誰もいない。

テレビ、有線の音楽、揚げ物の油が弾ける音、水道の音、笑い声、グラスに液体が注がれる音などでこの居酒屋は騒々しい。はちまきを締めた女の子が絶えず動き回っていてそれが必ず視界に入ってくるし、またさまざまな匂いが充満している。それなのに、どんな音や匂いや視覚にも違和感がない。周囲から際立つものがない。お前は現実を見

ていない、という声もまるで雑音のようなものとして聞こえる。道路工事のドリルのような、意味のない騒音がわたしの頭の中でこだまして言葉のように聞こえているだけではないかと思ってしまう。

直美の足元の虫がお互いに離れ始めた。きつと虫は最初から三匹だったのだ。ヨシモトサヨコという女が床に落とす煙草の灰の一片よりも、虫のほうが小さい。三匹が集まっていて、わたしはそれを一匹の虫だと勘違いしたのだろう。直美は薄いブルーのペディキュアをしているが、爪の周囲の肉が盛り上がっているためにきれいに塗れていない。ヨシモトサヨコという女の顔はまるでトカゲのようだった。テレビでは、キャッチャーが桑田にボールを投げ返そうとしている。奥歯に鶏の肉がはさまってしまった。トシはオニオンスライスを食べるときに、右手で持った箸の下に左手の手のひらを添える。それはわたしの父親の仕草と同じだった。わたしの父親は会計士で、わたしが絵を描くのが好きになって、そのことを伝えたときに、お前は画家にどんな苦労が必要かを知らないんだ、というような意味のことをわたしに言った。何でお前が絵を描かなきゃいけない。その話は恐ろしかった。画家はみんな自分の耳を切らなければいけないのだろうとわた

しは思った。わたしはしだいに絵を描かなくなった。絵を描き続けていたら自分の耳を切らなければいけなくなる、そう思うと、楽だった。実際、絵を描かなくなつてから、気分が楽になったのをよく憶えている。それは風邪が治る感じに似ていた。熱が引いて、からだが軽くなる感じにそっくりだった。

西麻布の店であの男の人と会つたあと、わたしはホステスの仕事が休みの日曜日に、二十時間名刺を描いた。一日で千枚ほどの名刺ができて、次の日曜日には絵葉書を作ることにした。その次に、わたしは自分の手をスケッチした。手をスケッチするのは名刺やハガキの何十倍という時間がかかった。わたしはそうやってほぼ二十年ぶりに絵を描き始めたのだが、そのことを誰にも言わなかつた。誰かに言うと、昔父親が言つたようなことを言われるのではないかと思つたのだ。何でお前が絵を描かなきゃいけないんだ。確かにわたしが絵を描かなければいけない理由はどこを探しても見つからない。だからお前は現実を見ていないって言われるんだよ。現実というのは、この居酒屋のようなものだ。音と視覚と匂いが充滿しているが、それぞれに違和感がない。

坂上か中上という人は三十代の前半だろう。紺の背広の下に白と赤のツートンカラーのポロシャツを着ている。トシと同じように昼間は家具のチェーン店のユニフォームを

着ているのだろう。そのチェーン店の本社は群馬にあり、中国の業者と提携して安い家具を売っている。トシは府中店に勤めているが、わたしは一度店を訪ねたことがある。絵を描く机が欲しかったのだ。四階建てのビルで、家具屋なのだから当然といえば当然なのだ。売場がものすごく広く、ベッドや棚やソファセットがほとんど隙間なくフロアに並んでいた。トシは買い物に付き合ってくれた。そのときわたしはトシの眼球に無数の家具が映っているのを見た。まるで地球儀のようだった。新しい机が届けられたとき、わたしはその上にB3のケント紙を置いて、まず鉛筆で大きな円を描いた。トシの眼球に映つた家具を描くつもりだった。星雲のように渦を巻いて並んでいたベッドや棚やソファセットを描こうと思つたのだ。ある日曜日に二十一時間かけてその絵を完成させ、家具の星雲、というタイトルを付けた。

テレビでは、桑田が次の投球モーションに入ろうとしている。坂上か中上という人は直美のタンクトップの胸元を見ながら有線放送の音楽に合わせてハミングをしている。直美は唇から垂れていたイカの刺身を吸い込んだ。髪を茶色に染めているが根元がすでに黒く伸び始めている。横のテーブルの黒い作業着のような服を着た女の肩が震えているのが見えるが泣いているのか笑っているのか、それとも単に肩を震わせているのか

からない。泣いていても不思議ではないし、笑っていても不自然ではない。ツヨシ君はテーブルにこぼれたコーンの粒を箸でつまんで灰皿に捨てようとしている。

その動作は何かの儀式のようだ。アフリカのある部族の祈禱師は伝統の祭りでライオンの仮面を被って踊るが、彼はライオンのふりをするわけではないと本で読んだことがあった。祈禱師は自分がライオンだと確信している。コーンの粒を箸でつまむツヨシ君にはそういった確信があるのだろうか。ツヨシ君は自分はコーンの粒を箸でつまんで捨てて中に捨てているという確信がないように見える。彼はコーンの粒を箸でつまんで捨てる人演技しているようだ。ヨシモトサヨコという女は細長い薄荷入りの煙草を吸うという行為を演じていて、坂上か中上という人は有線放送に合わせてハミングすることを演じている。直美は歯でイカを噛み砕くことを演じている。トシはオニオンスライスを口の中で混ぜ合わせることを演じている。当たり前のことだが、テレビ画面の桑田はブラウン管の粒子の濃度の違いによって像を結んでいるだけだ。テレビモニターの表面に平面的なミニチュアの桑田というピッチャーがいるわけではない。本当は誰もここにいないのかも知れない。たとえば裸でトシと抱き合っているときもそういう風に考えてしまうことがある。先週ひどく暑い夜にセックスをした。わたしは生理だった。終わって

から血と汗と精液で汚れたシーツを指差して、生きている証だ、とトシが言って、わたしはうなずいたが、本当にそうなのだろうか。シーツを汚しているのは明らかにわたしとトシのからだから出たものだったし、独特の匂いもあった。血も汗も精液も、からだの中で化学的な作用で生産され排出されるだけだ。しかも排出されたあとはずぐにただの物質になってしまう。

いつかトシに絵を描いていることを言おうと思っていたが結局言い出せなかった。なぜわたしはトシに絵を描いていることを言わなかったのだろうか。二十時間以上絵を描くことにしていたので日曜日にはトシに会わなかった。電話がかかってきても応答しなかった。トシには、父親が病気で毎日曜日には実家に帰らなければいけないのだと嘘をついた。彼はわたしの嘘を信じている。あることを決意したので、絵を描いていることと、その決意を今夜トシに正直に言おうと思っていたのだが、どういうわけか坂上か中上という人と直美を引き合わせる飲み会になってしまった。わたし以外は、今夜は飲み会をしたかったようだ。いづれにしろ大事なことを告白するような雰囲気ではない。

わたしはアルルという南フランスの町へ行ってみようと思っていた。ゴッホが住んだ町だ。ゴッホはアルルの町を多く描いている。実際のアルルの風景と、ゴッホが描いた

絵を並べて比べた雑誌を見て、わたしはアルルに行ってみようと思った。入院していた精神病院の中庭、夜のカフェ、麦畑、オリープの木、糸杉など、ゴッホが描いたものはごく普通の景色だった。ゴッホが描いたものを写真で見ると、糸杉のまわりの空気が渦を巻いているわけでも、オリープの木の幹が微妙に歪んでいるわけでもなかった。だがゴッホは別のものとしてその景色を見たのかも知れない。わたしを描いてくれというオリープの木の声を聞いた。ゴッホはそういうことを言っている。わたしはアルルに行つてゴッホが見た景色を実際に見てみたいと思つた。フランスのバカンスの季節が終わる九月あたりに、アルルにアパートを借りて住んでみようと思つた。調べてみると絵を教える教室もあった。フランス語も少しずつだが勉強した。ゴッホが収容されていた精神病院は、若い文筆家や芸術家のための市の施設になっているようだった。今までの貯金は往復のチケット代、それに二、三ヶ月アルルに住むために使う。

トシは家具屋を辞めることはできないだろうし、準備をしていないので一緒にフランスに行くことはできない。彼が一緒に行くと言つてもわたしは拒否しようと思つている。一緒に行きたくない。一人でゴッホが見た景色の前に立つてみたい。トシと一緒に景色がわたしたち二人に分散してしまう。景色について二人で何か話した瞬間にそれがト

シの部屋でテレビを見るのと変わらなくなつてしまうような気がする。

トシはオニオンスライスを食べている。彼はわたしの決意を知らない。はちまきを締めた店の女の子がわたしの背後を通り過ぎた。ツヨシ君はテーブルに転がった最後のコーンの粒を箸でつまんで灰皿の中に捨てた。ヨシモトサヨコという女は手を伸ばしてツヨシ君が捨てたコーンの粒の上に煙草の灰を落とした。トカゲが舌を伸ばしたようだとわたしは思つた。黒い作業着のような服を着た二人の女のうちの一人の肩が震えている。うなだれているので彼女は泣いているのかも知れない。現実を見ていないと非難されていたのはあの女なのかも知れない。あの女が見ていなかった現実とはどういう現実だろうか。

直美の足元の虫は直美のサンダルの陰に進んでいる。浮かせているサンダルの爪先が床に降りるとあの虫たちは潰つぶされてしまうだろう。潰れて死んでも虫たちには何が起つたのかわからない。坂上か中上という人が有線放送の音楽に合わせてハミングしながら生ビールのジョッキを口に運んでいる。ジョッキが顔に近づくと、彼は直美の胸元から視線を外した。ツヨシ君はコーンバターが盛られた皿にスプーンを近づける。テーブルにこぼさないようにさつきよりもっと少ない量のコーンを掬おうとしているようだ。

銀色のスプーンの腹に黄色いコーンが映っているが、わたし以外にはそれを見ている者がいない。

アルルへ行くと言ったらトシはどういう反応をするだろうか。三週間ほど前に、一緒にテレビを見ている時間がぞっとするほど退屈になって、別れよう、と言ったことがある。トシは冗談だと思っただけ。わたしが本気だとわかるとサトミという女とは別れると言いついた。今からサトミという女を呼びだして、わたしの目の前で別れると宣言してもいいと言った。そして結婚のことを話し始めたのだ。結婚をしてもおれは風俗に行くのを止めないかも知れない、とトシはそういうことを言った。風俗にいる女はみんなどこか悲しい。風俗の女があつげらんかんとしているのは大嘘だ。あいつらは親からきちんと可愛がってもらってない。だから知らない男のものをくわえても平気なんだ。自分を大切にできない。おれは風俗でそのことを知ったし、ユウコにはそのことな存在だということがわかる。おれは風俗でそのことを知ったし、ユウコにはそのことだけはわかって欲しいんだ。その日、トシはそういうことを言いながら泣いた。

トシはオニオンスライスの束に箸の先を差し込んでいる。トシは一日に二十時間以上家具屋で働くことができるだろうか。坂上か中上という人の唇にピールジョッキの縁が触れた。顔とジョッキが同時に後ろに傾いた。坂上か中上という人の喉が波を打ち始めた。ヨシモトサヨコという女は灰皿の中で黒く汚れたコーンの粒の上から自分のほうに手を引き寄せている。煙草からは薄荷の香りがしているはずだが、他にもさまざまな匂いがあるのでわたしは気づかない。直美はイカの刺身を噛み終わって呑み込んだようだ。トシの箸がオニオンスライスの束をつまんだ。薄くスライスされた白っぽいタマネギが肌色のかつお節と混じり合って箸で固定されて持ち上げられる。左手の手のひらが添えられている。醤油で黒く汚れたかつお節が箸のすき間からテーブルの上へ落ちていく。オニオンスライスがトシの唇に触れ、トシの歯がタマネギを噛み切る音が聞こえたような気がした。黒い作業着のような服を着た女の肩がわたしの視界の端で震えている。わたしはもうすぐアルルのことをトシに話すだろう。ヨシモトサヨコの手の甲の青い血管がツヨシ君のスプーンの柄に映っているが、わたし以外にそれを見ている人はいない。誰かが咳をしている。サラリーマンの団体がまた大笑いをした。トシの口の中でタマネギごとかつお節が噛み砕かれ混じり合っている。テレビでは、桑田が次のボールを投げた。